

谷 中 古 墳

矢吹町文化財調査報告書

1971

福島県矢吹町教育委員会

あ い さ つ

矢吹町教育委員会教育長 小林 重 孝

この地域は、日本人類学会雑誌に「三城目村の塚の腰という地名古墳累々たり。同地久頭山（旧道山）の山腹に横穴多く、14～15現存す。又神田村に鬼穴という長方形、船に似たる塚穴あり」と書かれている。

谷中の地形は、阿武隈川の峡谷で南西部は広くひらけ、古くから農耕文化の発生したところであると想像にかたくない。

幾度か川の氾濫による蛇行につれて、集落の変遷が点在する古墳により判断される。

谷中古墳は、川のすぐ左岸にあり、巨石が露出し、すでに盗掘されているものの、学術的調査により時代と地域文化を究明したいものと切望していたところ、幸い県教委社会教育課鈴木主事の指導の下に発掘調査の結果、貴重な資料が得られ、今までの謎が解明されるに至り、喜びにたえないところである。

附近には、まだ沢山の古墳もあり、往時の宿駅と交通路との関連など、考証についても調査の必要があり、県のご指導と地域の方々の深い理解と関心による文化財の保存にあたりたいと念願するものである。

は　じ　め　に

矢吹町教育委員会教育次長　　柏　村　秀　藏

昭和44年1月、教育委員会として、矢吹町文化財専門委員浅川和茂氏と教育委員会教育長小林重孝・同社会教育主事柏村秀藏の3名で、谷中古墳及び鬼穴古墳の調査を行ない、更に昭和44年2月には高速道路にかかる三峯森遺跡に、福島県教育庁社会教育課鈴木啓主事が派遣された際、矢吹町の文化財について調査を依頼した。調査した場所は、平鉢部落地内松葉久保にある板碑と谷中の古墳群・鬼穴古墳群を視察した。一緒に同行した者は、矢吹町文化財専門委員鈴木栄・教育委員会社会教育主事柏村秀藏の2名である。

谷中古墳及び鬼穴古墳群の調査のうち、谷中古墳は3基とも阿武隈川添いにあり、かなり重要な古墳であることがわかった。教育委員会としても、以前から専門委員会で調査の必要を話し合ってきた。その結果、昭和44年7月に発掘調査することに決定した。

谷中の3基の古墳は大きいものであり、そのうち1基と、鬼穴古墳の1基を調査した。その際協力した者は次の通りである。

直接担当されたものは、県教育庁社会教育課鈴木啓主事・同藤田定興・同村川友彦調査員で、協力参加したものは、矢吹町教育委員会教育長小林重孝・文化財専門委員浅川和茂・同岡谷善人・同鈴木栄・教育委員会社会教育主事柏村秀藏・教育委員会加藤義政・小林隆・吉田米藏・草野正一・浅川富土子・矢吹町役場職員総務課青木修一・住民課星主之助・須藤周平・建設課安藤重雄・仲西康男・産業課加藤弘一、その他一般から小林理平・藤井隆次・猪合幸男、その他休日を返上して、矢吹中学校教諭藤田正雄先生外20名の応援を得て、発掘調査が終了した。

その調査報告がまとまったので、発掘調査の動機・経過について報告します。

目 次

1. 立地・地形	1
2. 調査経過	
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 調査経過 谷中1号墳	2
鬼穴1号墳	2
3. 調査概要	
谷中1号墳	3
鬼穴1号墳	3
4. ま と め	4

図版・写真目次

1. 1:50,000地図	6
2. 1:10,000地図	6
3. 谷中古墳群地形実測図	7
4. 鬼穴1号墳墳丘実測図	7
5. 谷中1号墳石室実測図	8
6. 鬼穴1号墳石室実測図	9
7. 出土遺物実測図	10
8. 谷中1号墳奥壁立石・石室	11
9. 鬼穴1号墳墳丘	12
10. 鬼穴1号墳玄門・玄室	13
11. 埴輪片、谷中1号墳出土	14
12. 鬼穴1号墳副葬品	14

1. 遺跡名	谷中1号墳・鬼穴1号墳
2. 調査地	西白河郡矢吹町谷中
3. 調査期間	昭和44年7月16日～20日
4. 調査者	矢吹町教育委員会
5. 調査担当者	鈴木 啓
調査員	藤田定興・村川友彦・木本元治
調査協力者	別 掲

1. 立地・地形

阿武隈川と国鉄水郡線が並行して南北に連なり、東西の丘陵地帯の間に巾約1kmで氾濫原が帯状を呈して耕地化されている。

谷中古墳群は、この位置では河床が低く、蛇行する阿武隈川左岸際の畑地にあり、現況は陸稲・桑畑となっている。マウンドは全く姿を失い、石室のみが形骸をとどめている。1号墳は河岸より西へ50m離れて位置し、ほぼ河と並行して北へ40m隔って2号墳、更に北へ35m離れて3号墳がある。この3号墳の西側10mの地点から、大正10年頃、佐久間道之助氏が武人植輪を発掘しているという。

なお、1号墳の保存状況は不良だが、2・3号墳は壁・天井石とも遺存している。

鬼穴1号は、谷中古墳群の西方650mの丘陵に所在している。東西に30m隔たる2基の円墳より成り、東側の1号墳は古く開口し、2号墳は未開口で保存の良好な径20数メートルの円墳である。

両古墳群の所在地点周辺の同時代遺跡は次のとおりである。

三城目の久当山に横穴15基。同じく弘法山に経塚とみられる大小のマウンド17基がある。塚の越古墳群（当初約50基）からは、石棺・直刀・鉄鏃・管玉等が出土している。そのほか、塚原に数基五太夫塚と呼称された3基、横山に数基と数々あった古墳群が、戦前・戦後の開墾でほとんど姿を消したという。

2. 調査経過

1. 調査に至るまでの経過

昭和43年秋、町教委より谷中の3基の古墳跡の石について、耕作上の障害と庭石ブームから地主が除去の計画をもっているが、手続きの要否について問い合わせがあった。鈴木が実見した結果、除去されるという1号墳についてのみ記録保存の要を認め、調査に至った。

鬼穴1号墳は、地主の新興製作KK工場長佐藤信行氏の理解によって残されたものである。同工場敷地内に所在する小山状のマウンドは、整地の際開地の埋土に利用する計画だったものを、同氏の判断で設計変更し、裾部を削土したのみで、頂部削平の予定も取り止め、保存されることになった。

墳丘の雑林を伐採し、桜・五葉松・芝を植えて保存を推進された佐藤氏に深く謝意を表すものがある。

2. 調査経過

谷中1号墳

奥壁の立石・天井石などが露出し、他は雑草に覆われているが、畑中の石塚として耕作中に雑物を推積したものであるから、マウンドとしての実測の必要を認めない。石室内より皮鞭・缶詰空缶・みやこ染空瓶・ハエ取り器などが出、かつて露出していたことを知る。周辺および流入土中には夥しい埴輪片を含んでいる。羨道内には側壁の崩落石材がある。ジャッキをもっても外部に搬出不可能な石は残置した。床の敷石を確認したが、玄室上の蓋石は重量数tもあり、両壁の石は失われていることから、流入土の完全除去は不可能である。羨道部の蓋石とみられたものは、庭石として搬出作業中もて余して放置したもので原位置でないことを確認した。

玄室上の蓋石に支柱を3本立て、床面を追ったが、僅かずつ蓋石が下がり、支柱の信頼度が弱く、危険を伴うので、中央部のみ幅約50cmで奥壁に達するまで床を追うことにする。

玄室両側壁内側に接し、左右対象に2枚の立石があり、両者の内側に多量の粘土が付着し、閉塞の意図を思わせる。西側は側壁に接し垂直で、天井石がずり落ちたものとみるのは困難である。

構造は当初の思わくを越え、流入土砂の量も尠大で、清掃ていどの調査ではすまされなくなり、酷暑の中作業は難渋を極めた。

玄室奥壁近くで、平らな割石2個を発見した。敷石は羨道・玄室ともに粘土を張りながら二重に施工され、保存は良好である。奥壁下で鉄の細片2点出土、鉄鱗片である。玄室ほぼ中央より金環1点発見。写真撮影・実測を行なって作業終了する。

鬼穴1号墳

地元民の話によれば、明治の頃には開口していたというから古く盗掘されたい。工場用地に買取されたが、整地の際マウンド基部数メートルを削ったのみで保存された。

石室はかつて乞食の住まいとなり、その名残りの物品が散乱し、焚火で天井は煤に覆われていた。調査は、床に推積する土砂20cm～40cmの除去と、石室の実測という清掃・記録をわらいとした。床より40cm浮いて糸切り底土師首皿が出土したが、後世の物と判断された。排土作業は一輪車をもってしても仲々進捗しない。床は粘土を張って敷石を二重に施工している。粘土には、鉄鱗10数点・硝尻1点・切羽1点と琥珀霽玉1点がある。

なお、出土状況は、まとまった姿でなく床全面に散乱状態を示し、2次の攪乱をうけているものとみられる。

敷石上にも焚火の跡が認められ、かつて床面が露出していた時代のあったことを物語っている。石室の実測は、床・天井・両壁・羨道まで柵目をかけ微細図を作成した。

3. 調査概要

谷中1号墳

主軸方位はN40°Wである。奥壁は花崗岩の1枚石を立て、露出部だけで高さ1.4m・幅1.85m・厚さ0.6mである。玄室の蓋石の残存は1枚のみであるが、3m×2.9m、厚さ約0.4mの花崗岩を用いている。羨門・玄室を含めた全長は、9.3m、玄室6.3m、同幅1.8mである。石材はほとんど花崗岩を用いている。玄室の閉塞は厚さ0.9mで、凝灰岩塊を積んでいる。

羨道は1.6mを計るが、羨門の位置が不明で、先端がカットされているとみられる。材質は凝灰岩を用いている。地形からマウンドの原形は前方後円の疑いがある。

玄門部の構造は、袖部が180°両側に広がる形をとらず、2段にゆるやかに0.9m進んで最大幅となるが、この場合左右対象ではなく、西壁の開き方が大きく、一見片袖状にみうけられる。室の中央よりやや玄門側に寄った位置に、左右対象に平板状花崗岩を2枚立てている。東側の石は下部が内側に入りこんでいる。この障壁状立石背面の玄室両壁石積みに省略はない。従って、石室積成後に設置したものである。

なお、両立石間に多量の粘土を詰めている。

蓋石下の玄室両壁の石材は、ほとんど失われている。流入した土砂で蓋石が支持されているわけであるが、重量の大きい蓋石下の積石が、しかも両壁とも搬出されていることは、どう理解したらよいのか。なお、床のレベルはもとの地表数十センチ掘削している。

石室を中心に半径20mの範囲には濃密に50mの範囲には稀薄に埴輪片の散布がある。石室内流入土砂中にも含まれている。円筒埴輪片は数百点を数える。小片のみであるが、復元径は28cm前後、厚さ1.3~1.7cmである。外面は縦のハケ目が共通で、内面は横のハケ目を有するものと無いものがある。厚さ0.8~1.0で径が前者より大きいものが若干認められる。形象埴輪片4点のうち、帯状朱彩があり、ボタン状小円盤の張付を有する1点は馬具か武具であろう。埴輪の材質・焼成とも良好で明かるい赤色を呈している。

遺物一石室内の出土品は、鉄鏃の細片2点と金環1点のみである。金環は1.9×2.7cm、太さ0.6cmである。銅の地に0.1~0.2mmの金をメッキしたもので、ほぼ完存し、重量は19.0gである。床は玄室・羨道とも同一施工で、粘土を張って小円礫を敷いている。

鬼穴1号墳

主軸方位は、ほぼ正確に南北を示している。マウンドは、ブルドーザーで裾部を3~5m削り取られているが、現況で27×26m、高さも頂部を若干削平しているが4.1mを計る。南西の開口部のマウンドは削られ畑となっているが、開墾・耕作によって羨道の先端と羨門が失われたのであろう。

玄室は、両裾を有して、や、銅張りをみせる平面をもち、両壁は弱い持ち送り積みである。石

材は花崗岩を主とする河石を用いている。

奥壁は1枚石で天井までの高さ1.95m、幅1.93m、最大幅はほぼ玄室中央で2.36mあり、東壁は直線に近く、西壁に湾曲がある。

玄室と羨道は仕切り石で区画している。奥壁から仕切り石まで5.34m、羨道の残存する長さ3.5m、全長8.84mである。(但し羨道床面石敷きの先端まで。羨道壁の残存部までは8.05m)

玄門部袖幅は、西が42cm、東が37cmで対象ではない。床は粘土張りに小円礫を二重に敷設している。天井石は、玄室部の三枚があり最奥の石は奥壁上面に乗せている。羨道部天井は崩落搬出されたものであろう。床面レベルは当時の地表面である。

遺物一床面精査の所見から、かつて敷石面まで露出していた時代があり、従って鉄鍔片等10数点の出土状況は、全面に散出した状態で、2次の移動のあったことは明らかである。

鉄鍔は有茎式柳葉10数点で、他に刀子片とみられるもの1点がある。

切羽は5.0×3.1cm、厚さ0.1cmの金銅製である。

鞘尻(鏝)は長さ5.2cm、径3.2×2.2cm、鉄製で先端に3mmの銅の輪をはめている。内部に木質部が残存している。

鉄肌に着着して布帛痕が明瞭に残っている。副葬の際織物に包んだものであろう。袋に入れたのではなく、被布の処理は整然と折り重ねた状態を示している。鞘内径は2×0.7cmである。

埴輪片はマウンド裾部周辺に多量の散布をみる。ブルトナーで削った時、ほぼ完形の円筒埴輪が出土したという。下部をめぐる1列の一部が破壊されたとみられる。中に形象埴輪片数点があるが、原形の判断はつかない。なお、谷中古埴群の埴輪より、若干薄手ではあるが、区別はつけにくい。なお、注意を要するのは長さ1.2cm、断面0.5×0.7cmの隋円形を呈し、径0.2cmの穿孔を有する琥珀玉1点の出土である。

まとめ

谷中古埴群の所在する一帯は阿武隈川の氾濫原で、近代に入ってからでも明治21年、同35年、昭和16年と大洪水に見舞われている。丘陵縁と現河床の間は数百メートルに亘って水田化された平地であるが、丁度両者の中間に現河床と平行にかつての流路と河岸段丘が残っており、この数百メートル幅の間が泥海化するという。昭和16年には谷中部落を含め一望が水没したという。100年に3度の大氾濫は、古墳築造以来にすれば数10回を推測させるから、マウンドは度重なる洪水で失われたものとみられ、巨大な天井石が奥壁からずり落ちているのもなげける。2・3号墳もマウンドは完全に失われているが、石組みは原形を保っているようである。

鬼穴は台地上であるため水没することなく、1号墳は早くから開口していたにもかかわらず、1号墳敷地内に埋り込まれても奇跡的に保存された。2号墳は完存している。

阿武隈川流域に所在する古墳は、地方的には大古墳に属するものが多く、石室の構造の明らかな

ものもいくつかある。これらのうち、比較的大形の横穴式石室で、奥壁に1枚石を用い、やや胴張り有するものを拾えば、福島市甲塚古墳¹、須賀川市蝦夷穴古墳²、玉川村後作田1号墳³、福島市城山古墳⁴、須賀川市菰内古墳、同前田川大塚古墳、同小作田欠下古墳、同田中田中古墳⁵等がある。

これらはすべて玄門部に袖を有さず、所謂撥型を呈するもので、玄室・羨道両壁が一線に施工されている。

横穴式石室の原形が、方形の石室に狭長な羨道を付したものであるところから、これら撥型石室(羨道を含めて)に先行するものが袖を有する横穴式石室であると理解したい。鬼穴1号墳は明瞭な両袖をもつものに対し、谷中1号墳は不明瞭となり、前者の退化(発展)形態とみることできよう。

両者ともに遺物に恵まれず、出土品のセットからの考察はなし得ないが、鬼穴1号の深紅色琥珀製棗玉は、類例⁶が少ない点注意すべきである。両1号墳ともに形象植輪・円筒植輪を伴い、鬼穴1号墳では金銅製の刀を布帛に包んで副葬している点も指摘できる。

ともに羨道部を欠いてはいるが、玄室の長さが、谷中で6.3m、鬼穴で5.3mで、東北一の規模を誇る須賀川市の県指定史跡蝦夷穴古墳石室クラスと云うことができる。

年代を推量する出土品を欠くが、石室構造の推移観より判断すれば、本県で著名な撥型の長大な横穴式石室に先行し、6～7世紀の交にその位置を与えたい。

なお、谷中1号墳においては、調査体制、計画から周濠の調査に手がまわらず、マウンドの規模を確認し得なかったことと、2・3号墳の清掃・実測が急を要するので、第2次調査が待たれる所以である。

鬼穴1号墳については、地主の好意で保存できたこと、地域を代表する古墳であること、比較的保存が良好であることから、条例による保存を推進する必要がある。

最後に、炎天下激しい作業に協力くださった方々に心から感謝申し上げます。(鈴木啓)

注 1. 福島県史 6 昭和39年

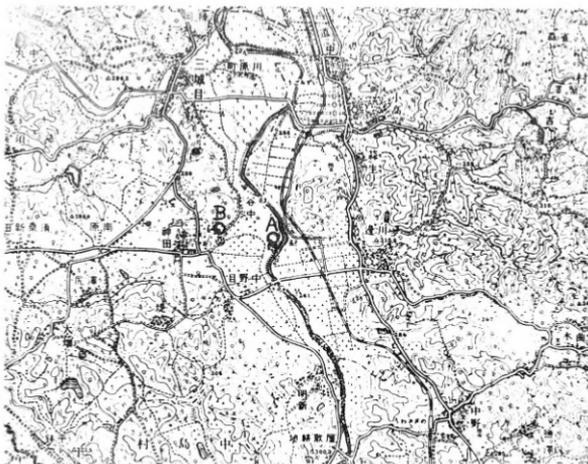
2. 同上

3. 同上

4. 昭和45年12月 福島市教育委員会調査

5. 何れも永山倉造氏教示

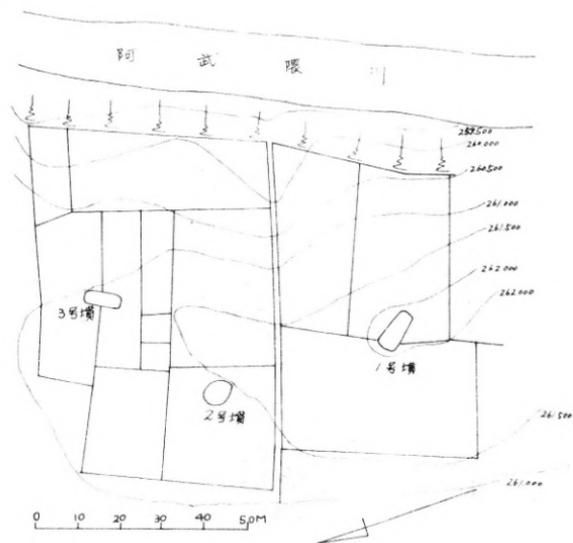
6. 郡山市田村町正直23号墳出土のものは琥珀製小玉である『日本の考古学Ⅳ』河出書房 昭和41年。



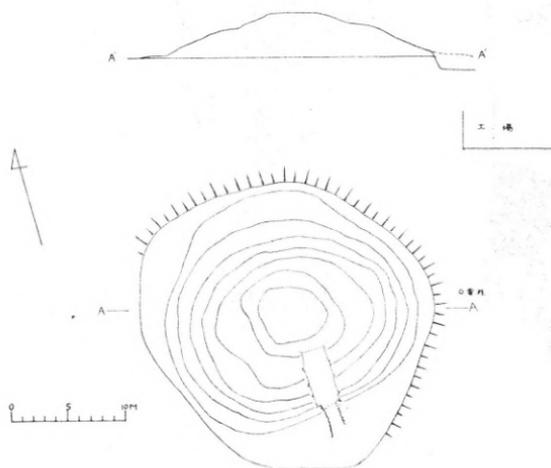
1. 1 : 50.000図 A 谷中古墳群 B 鬼穴古墳群



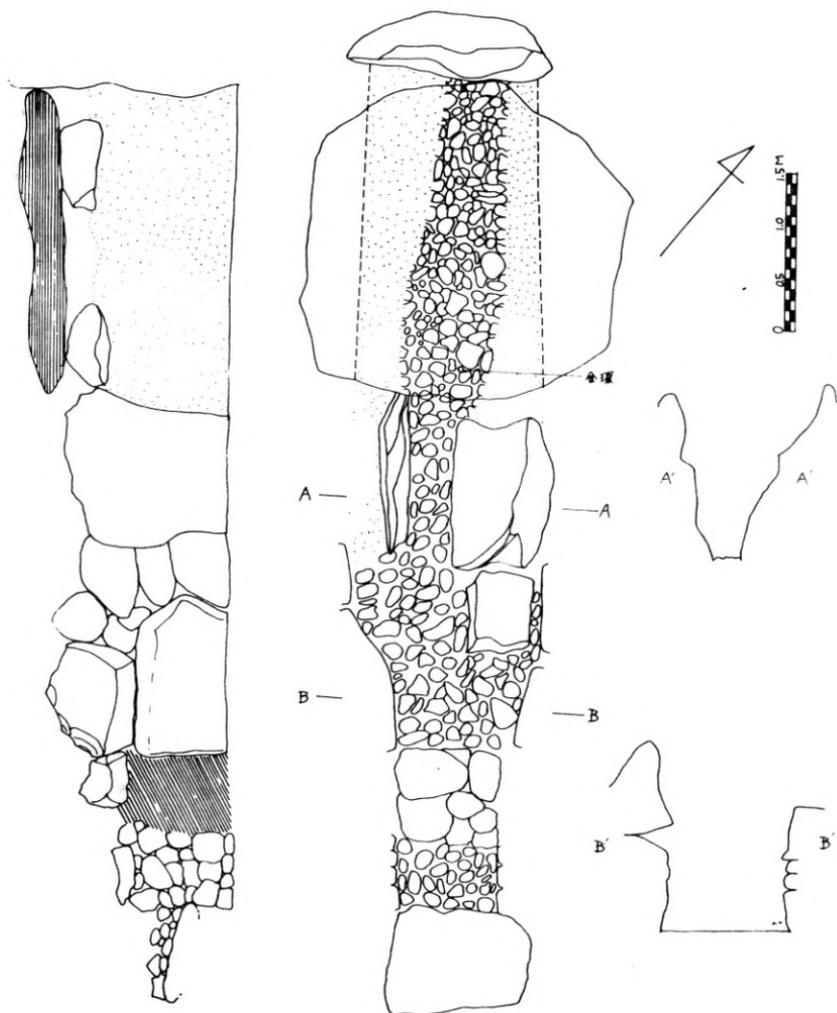
2. 1 : 10.000図 谷中1・2・3号鬼穴1・2号



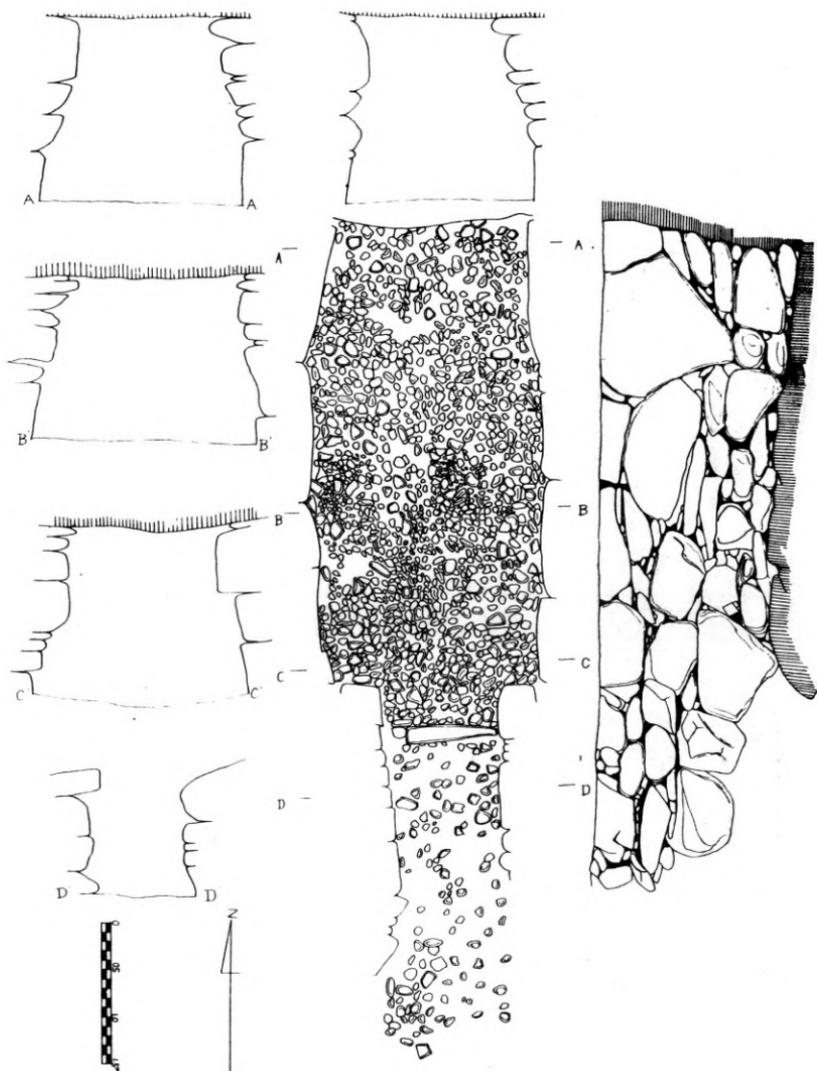
3. 谷中古墳群地形実測図



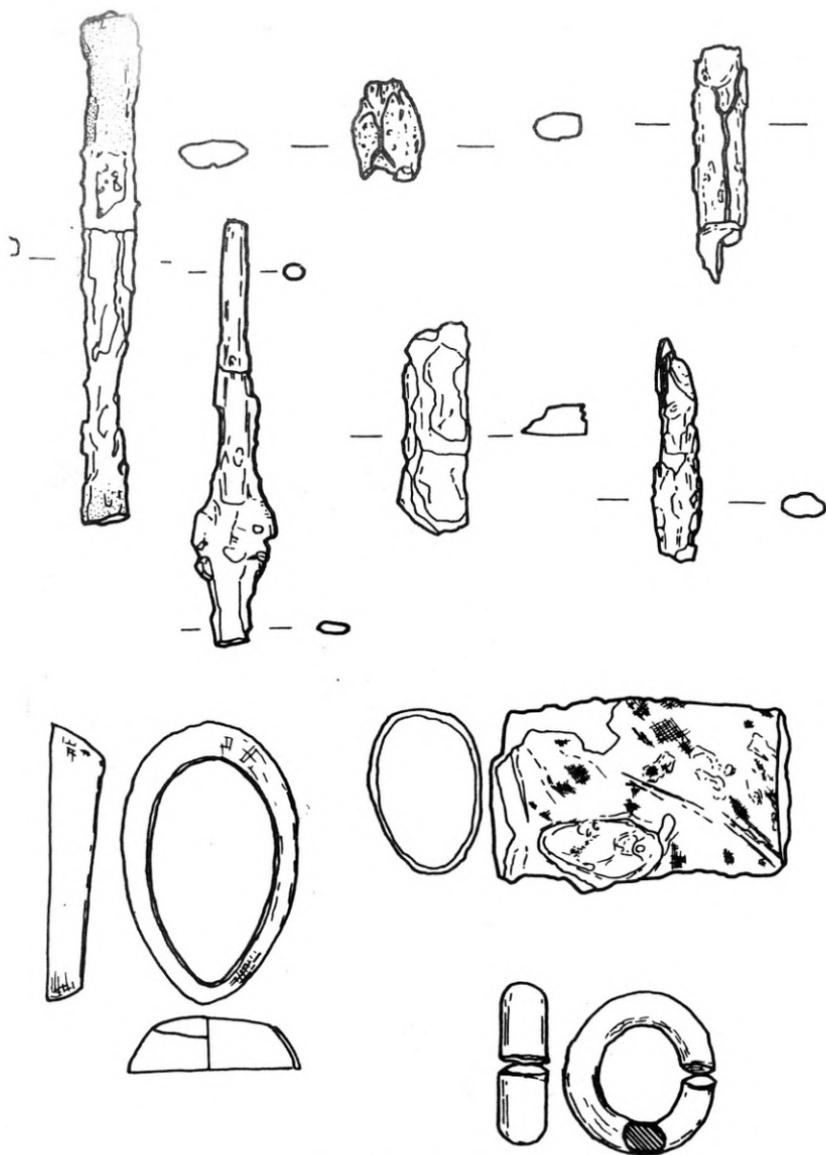
4. 鬼穴1号墳墳丘実測図



5. 谷中1号填石室实测图



6. 鬼穴1号墳実測図

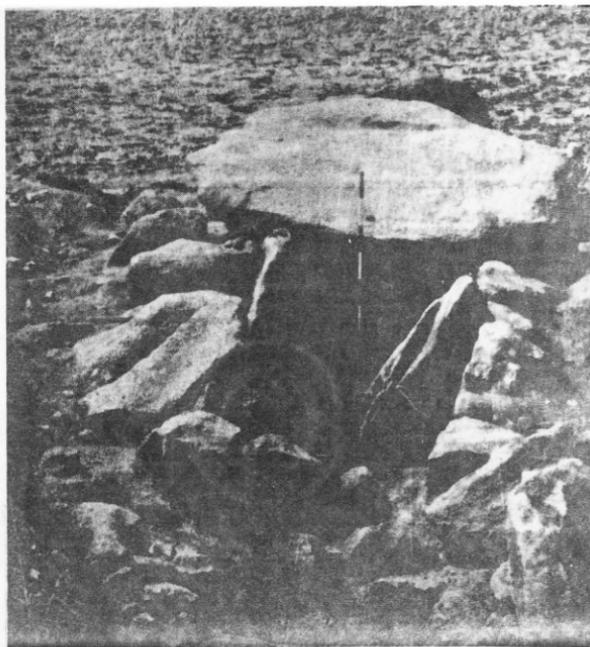


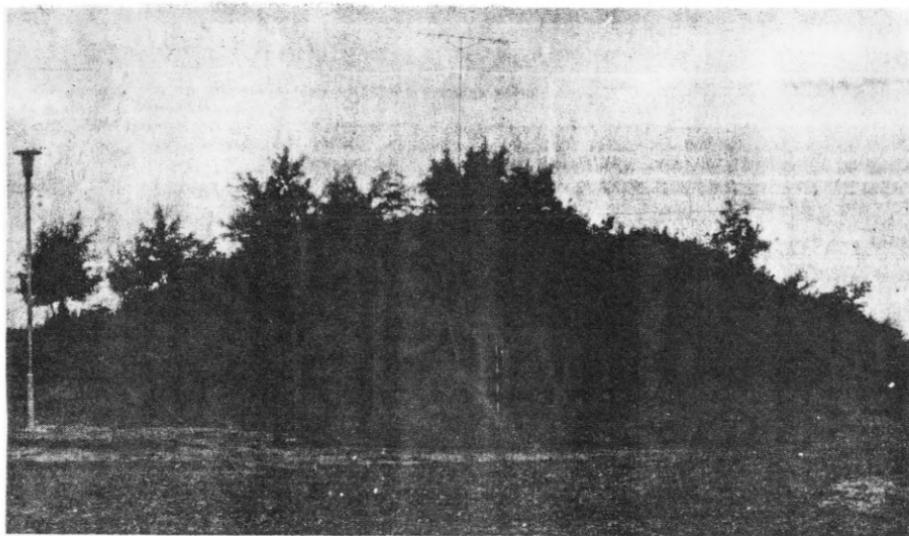
7. 出土遺物実測図 (全環のみ谷中1号墳、実大)



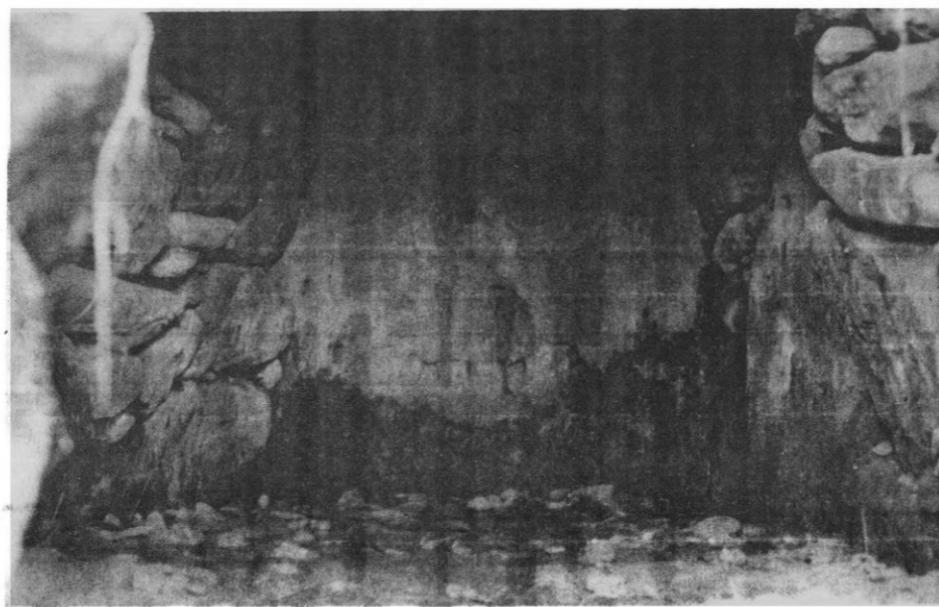
8. 上 谷中1号墳奥壁立石

下 同石室

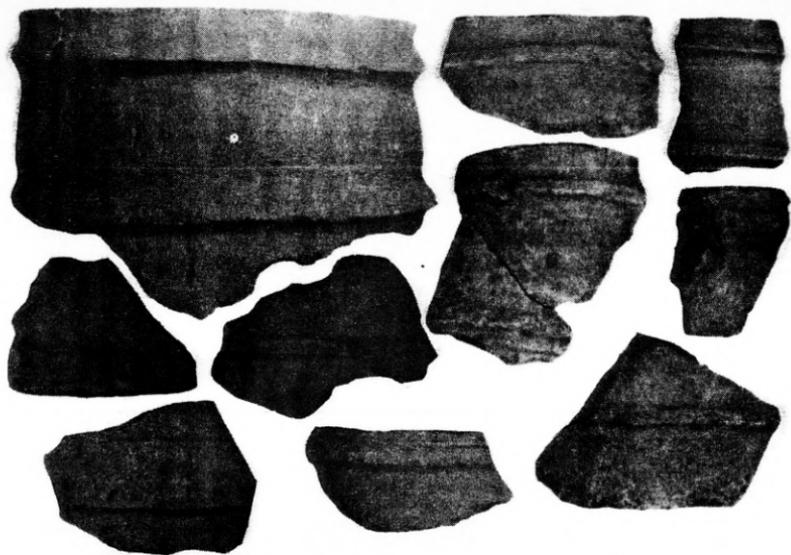




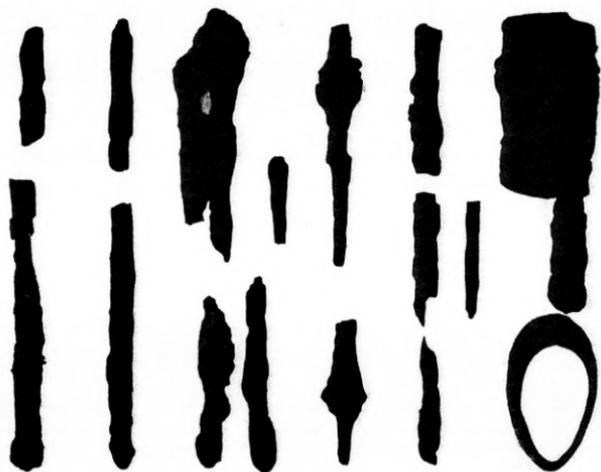
9. 鬼穴1号墳墳丘 上・北側、下・南側



10. 鬼穴1号墳 上・玄門 下・玄室



11. 埴輪片 谷中1号墳出土



12. 鬼穴1号墳副葬品

昭和46年発行

谷 中 古 墳

—矢吹町文化財調査報告書—

編 集 矢 吹 町 教 育 委 員 会

発 行 西白河郡矢吹町大字矢吹字西側37

印 刷 栄 印 刷 株 式 会 社

福 島 市 栄 町 10 番 16 号